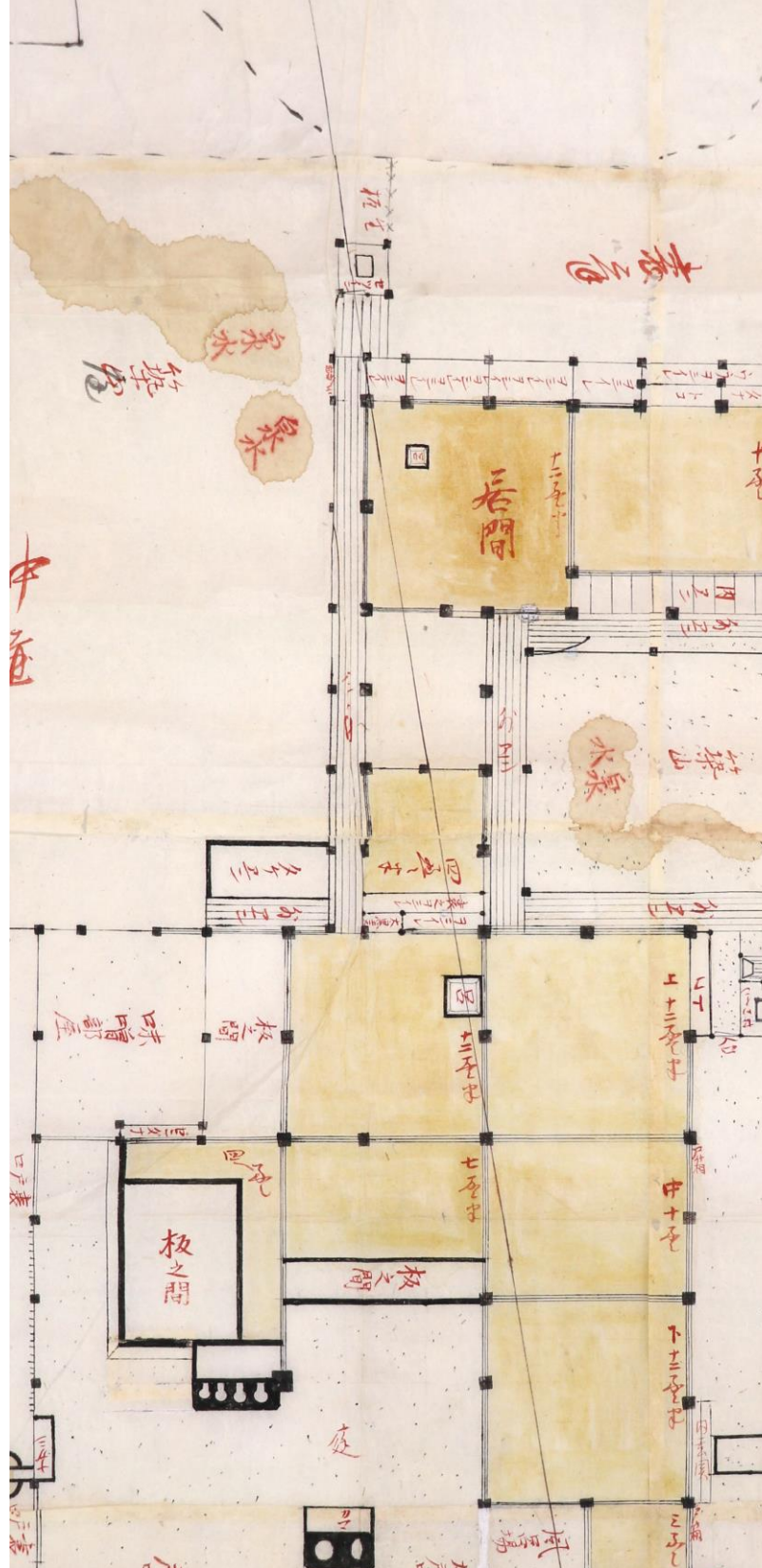


年中行事

袋井市歴史文化館 令和三年度企画展
中遠の古刹 真言宗西楽寺Ⅲ



袋井市春岡の古刹、西楽寺に残された、4000点余りの古文書から歴史をひもとく全4回の展示シリーズ。

第3回のテーマは「年中行事」です。西楽寺で行われていた年中行事と、江戸城で行われていた儀礼についてご紹介します。取り上げる時期は、史料が残っている幕末～明治期が中心です。

儀礼の場では、参加者の力関係や序列が、席の位置や動き方などで、目に見えるようになります。そして、儀礼は、どういう部署がどこから必要物資を調達しているのか、など、流通にも関わるテーマです。

また、生きて続いている儀礼は、その時々状況にあわせて変化していきます。儀礼の変化は、時代性を映すものでもあります。つまり、儀礼を調べることは、歴史の基礎調査とも言えるのです。

現存史料が少なく、ほとんど触れられてこなかった西楽寺の年中行事と、史料は多く残っていながら、おそらくはその字の細かさから、ほとんど読まれてこなかった江戸での儀礼。今回も新しい内容ばかりです。

『年中行事扣』

誠実に編集された西楽寺の儀式書

西楽寺の年中行事書

西楽寺文書に、『年中行事扣』（西楽寺文書近世一六八六）という史料があります。

表紙には、「梅本坊栄運記之」（弘化四年^{丁未}正月吉旦）とあり、弘化四年（一八四七）に、当時梅本坊の住職だった栄運房有盛が編集したことがわかります。

有盛は、西楽寺住職有海の弟子で、天保九年（一八三八）に印可（『新可結衆牒』、天保十年（一八三九）二月十五日に梅本坊住職となり（『住職御取調帳』、嘉永三年（一八五〇）に西楽寺住職となった（『当院拾九世有盛入院披露録覚』）人物です。

ちなみに、弘化四年当時の西楽寺住職は、深昭房栄岳という人物です。

形態は縦帳（袋とじ和綴じ装丁のノート）で、縦259mm×横179mm×厚6mmです。

元々あった縦帳（縦240mm×横160mm）の表紙と裏表紙の上から、「静岡県袋井市立山梨高等家政学校」と印刷された野紙が針金で綴じられています。

いつかのタイミングで、山梨高等家政学校の人が調査した時にこのようにしたのでしょ。皆様は真

似しないでください。

『年中行事扣』の内容は、正月元日から十二月二十九日までの年中行事を書いたものです。

次頁に一覧表を載せましたが、『年中行事扣』は、毎月行う行事は、最初に書いた後は、毎月同じとだけ書いて省略していますから、実際にはもっと多くの行事がありました。

また、『年中行事扣』は、弘化四年現在で行っている行事の次第とともに、古例や記録など、弘化四年の作法とは違う次第も併記して、変化の理由などを記している点に特徴があります。

時折、誰それが住職だった頃が変わった、という書き方もあり、具体的な変化の時期が分かります。

その時期を調べると、噂で聞いたという十二世住職鑲恵と、記録が残っていたという十三世住職元宜を例外として、他はほぼ全て、有盛と面識があった、十七世住職有海と十八世住職栄岳の時の変化です。

それ以前については、例えば、正月元日条に「古例如何御座候哉。先代有海代方相始申候」（それより前のことは知らないが、先代有海の代から始めた）とあるように、「知らない」と書いています。

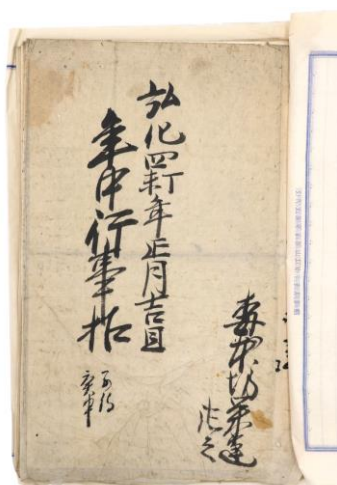
えてして、儀式書は、書かれた当時の状況を反映して、古例を創作するものですが、正直に「昔のことは知らない」と書く西楽寺文書『年中行事扣』は、かなり誠実な態度で編集されているようです。

【重要史料】

- 1、『新可結衆牒』（西楽寺文書近世一〇号）
- 2、『住職御取調帳』（西楽寺文書近世五〇号）
- 3、『当院拾九世有盛入院披露録覚』（西楽寺文書近世五九号）
- 4、『年中行事扣』（西楽寺文書近世一六八六号）



『年中行事扣』正月元日条



『年中行事扣』
本来の表紙



月	日	項目	場所
1	元日	出仕	本堂
		読経	鎮守（十所権現）
		鎮守荘厳	鎮守（十所権現）
		本堂荘厳	本堂
		鐘つき	門前（薬師堂か）
		大師堂荘厳	大師堂
		下堂・薬師堂・庚申堂拝礼	下堂、薬師堂、庚申堂
		理趣経陀羅尼読経	客殿
		導場に備物（供え物）	導場（客殿か）
		年神棚前祈念	（客殿か）
		喰物仕度	勝手
		諸神仏へ供え物	上の間、中の間、下の間
		護摩	—
	2日	出仕	本堂
		年頭年玉	油山寺から来る
	3日	出仕	本堂
		学頭護摩	—
	4日	近村廻り	近村
	5日	（公儀御年頭出府進納調）	—
		久津部陣屋へ年頭使僧	宿屋、久津部陣屋
		（江戸屋敷へ出府）	—
		宿へ帰る（吸い物）	宿
		油山寺へ年始	油山寺
	6日	その他檀家宅へ年玉	檀家宅
		七草	年神棚前
	7日	本堂出仕	本堂
		薬師堂参詣の後住職年始見舞	薬師堂、檀家宅（元宜代から）
		鎮守へ神酒	鎮守（十所権現）
		七草粥餅を諸仏神へ上げる	—
	8日～10日	寺領へ参る	寺領
		無用	—
	10日	金毘羅へ神酒	西之山金毘羅様（遥拝か）
	11日	蔵開き	蔵（土蔵）
		荘松片付	—
	12日	本堂荘片付	本堂
		祖師興行大師法事	客殿
	14日	（日付のみ）	—
	15日	出仕	本堂
		般若心経転読	—
		供え物	本堂、鎮守殿（十所権現）、客殿
		齋	—
		齋（朝）	—
		出仕	鎮守（十所権現）
		大般若経転読	—
	16日	札を納める	—
		休日	—
	17日	將軍様縁日	客殿
	20日	將軍様縁日	客殿
	21日	大師堂出仕	宍海から大師堂、元宜までは客殿
		高平山毎月護摩修行	高平山
	24日	將軍様縁日	客殿
		地藏講（弘化4年には中絶）	本堂（弘化4年には中絶）
	25日	初の天神祭	—
		淨恵立日	—
	26日	中興尊昭・宍実立日	—
	28日	本堂出仕	本堂（本堂は院代明弁から）
	29日	將軍様縁日	客殿
	晦日	將軍様縁日	客殿
2	1日	出仕	本堂
	初午	初午	門前（薬師堂）、本堂
	2日	開山行基入定日	大師堂
	5日	祭礼	鎮守殿（十所権現）
	15日	常楽会	大師堂
	—	將軍様縁日（他の月と同じ日）	—

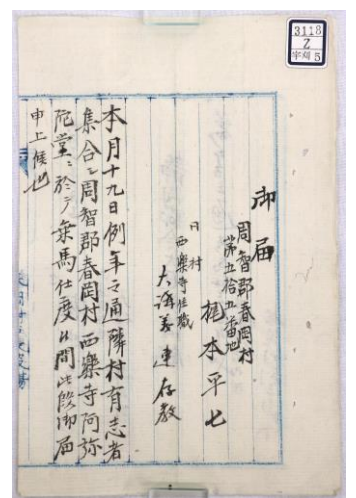
月	日	項目	場所
3	1日	（出仕か）	（本堂か）
	節句	節句	本堂、鎮守（十所権現）
	15日	（出仕か）	（本堂か）
	20日	本堂荘厳	本堂
		宵の勤	（本堂か）、高平山
	21日	本堂供	本堂
		高平山出仕（高平山御影供）	高平山
		齋	（学頭坊か）
	28日	法事	客殿
		（出仕か）	（本堂か）
4	—	將軍様縁日（他の月と同じ日）	—
	1日	出仕	本堂
	8日	誕生会	本堂
5	17日	東照宮御祭祀	鎮守殿（十所権現）
	3日	出仕	本堂
		將軍様縁日	客殿
	5日	節句	本堂
6	15日	般若心経転読	—
	3日	出仕	本堂
		將軍様忌日	客殿
	15日	三沢天王	三沢天王
	28日	岸之坊浅間祭	岸之坊
7	晦日	施餓鬼準備	客殿など
	1日	出仕	本堂
		施餓鬼準備	—
	2日	施餓鬼	檀家宅
	3日	施餓鬼	檀家宅
	4日	施餓鬼	檀家宅
	5日	施餓鬼	檀家宅
	6日	施餓鬼	檀家宅
	7日	七夕	本堂、御宮（おそらく十所権現）
	7日	施餓鬼	檀家宅
		施餓鬼	檀家宅
	8日	施餓鬼	檀家宅
	9日	施餓鬼	檀家宅
	10日	施餓鬼	檀家宅
	11日	施餓鬼	檀家宅
	12日	施餓鬼	檀家宅
	13日	願成寺へ差し入れ	願成寺
	14日	盆	庭、墓、客殿、新盆の家、裏堂牌壇
		檀家の家を回る	檀家宅
8	15日	施餓鬼	本堂、客殿
	16日	施餓鬼	聖霊棚
	17日	聖霊弘	—
	24日	地藏会	本堂（饗恵代）
		盂蘭盆	—
	晦日	餓鬼幡を下げる。	—
9	1日	出仕	本堂
	15日	八幡山八幡宮祭祀	八幡山八幡宮
	（1日か）	出仕	本堂
		御宮ほかへ供え物	御宮（おそらく十所権現）
12	9日	般若心経転読	—
	15日	元宜座月	神酒を氏子へ（十所権現か）
	19日	三沢大明神祭礼	三沢大明神
	10月、11月は記述なし		
	11日	祖師饗講	客殿、学頭坊
12	12日	御勤	—
	13日	すす払い	本堂、客殿など
	14日	米搗	—
	15日	本堂修法結願	本堂
	21日	出仕	本堂
		高平護摩結願	高平山
	24日	明日之餅搗支度	—
	25日	餅搗	—
28日・29日	松荘		—

弘化4年（1847）正月『年中行事扣』（西楽寺文書近世1686）所収年中行事一覧表

「日」欄の「—」は毎月行われている行事をまとめて書いた項目などを表している。

西楽寺の馬とび

明治に変化した地域の行事



明治16年「御届」
袋井市歴史文化館所蔵

西楽寺の馬とび

現在、西楽寺では、二月の第四日曜日に馬とびの行事が行われています。

西楽寺の馬とびは、『宇刈村誌』（参考文献1）では、「初午」と呼ばれる行事のバリエーションの一つ、と説明されています（二三〇―二三二頁）。

『袋井市史 資料編 民俗・文化財・年表』（参考文献3）の西楽寺の馬とびに関する箇所も、『宇刈村誌』を丸写しにしています（一八四頁）。

「初午」とは、各地の稲荷社で行われる行事で、旧暦二月初の午の日に参詣する行事です。農耕にも関わる行事で（馬は農作業にも活躍してきました）、都市部では、大人が大騒ぎする行事だったようです。

中泉役所など各地の役所も、初午の日には開放されていたらしく、一説には、民衆の様子を見るためのお祭りだった、とも言われています（参考文献4）。

西楽寺の馬とびは、『宇刈村誌』によると、西楽寺のお堂へ、馬と一緒に参りする行事で、なぜか二回目の午の日に行われていたそうです。

『宇刈村誌』の頃には馬の上に子どもをのせてお

堂を回る形になっていたようです。

二回目の午の日に行く、という点で、「本当に『馬とび』は『初午』なのだろうか」という疑問が浮かびます。

また、『宇刈村誌』によると、春岡で馬が農業に加するようになったのは、明治三十五年（一九〇二）以降だと言います（七九頁）。

初午は農耕馬への感謝のお祭りでもありますから、謎は深まるばかりです。

ここで、『年中行事扣』（西楽寺文書近世一六八六）の二月初午条を見ると、内容は法会ばかりで、馬は一切登場しません（次頁に二月初午条全文）。

また、西楽寺文書を調べてみても、馬が関わる行事に関する記事が、一向に見つかりません。

ここで、袋井市歴史文化館にある史料を調べてみると、明治十年代に、西楽寺が役所に提出した「乗馬」のイベントに関する書類が見つかりました（重要史料2、3、4）。

一通目、明治十二年（一八七九）のものによると、四月六日〜八日の「馬頭観音法会」の時に、近隣の有志が乗馬する、とのこと（重要史料2）。

二通目、明治十三年の書類によると、四月三日に、隣村の有志が西楽寺阿弥陀堂（本堂）で乗馬をする、とのこと（重要史料3）。

三通目、明治十六年の記事を見ると、二月十九日に、隣村の有志が集合し、西楽寺阿弥陀堂で乗馬（重要史料4）。

明治十六年に初めて、乗馬の行事が二月の二の午の日に行われるようになりました。それ以前は、四月の誕生会の頃に乗馬していたようです。

ちなみに、日の十二支を算出する式（参考文献2、二二五頁）で計算すると、明治十六年二月十九日は二の午の日であることが分かります。

残念なことに、『年中行事扣』の四月の部分を調べてみても、「馬頭観音法会」は見つからないのですが、これらの史料から経緯を推測してみましよう。

江戸〜明治十年代前半まで、西楽寺では、四月の誕生会の頃に近隣の有志が集まって、乗馬のイベントを行っていた。西楽寺の年中行事とは直接関係がないので、西楽寺では記録に残していなかった。

明治になり、西楽寺も乗馬に関わるようになった（明治の住職宥猛の考えもあったのでしょうか？）。

初午―馬―乗馬の連想から、乗馬が二月に移った（まとめられた？）が、初午の日は、西楽寺では法会があり忙しいので、乗馬は二の午の日に行うようになった。

あくまで現存史料からの推測ですが、おおむねこのような理由ではないでしょうか。

地域のイベントに寺院が関わっていく、興味深い事例なのではないかと思えます。

【重要史料】

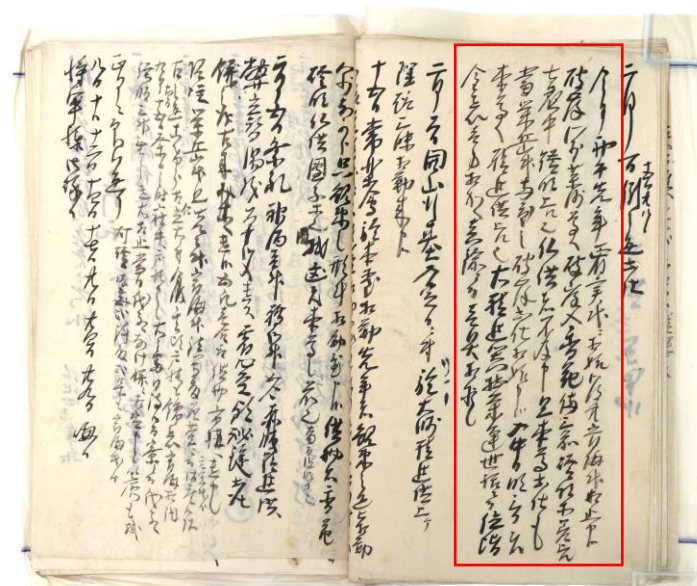
- 1、『年中行事扣』（西楽寺文書近世一六八六号）
- 2、明治十二年四月五日「願書」（14春岡村外2ヶ村戸長役場文書二四六二号／袋井市歴史文化館所蔵）
- 3、明治十三年三月二十八日「御届」（14春岡村外2ヶ村戸長役場文書二四八〇号／袋井市歴史文化館所蔵）
- 4、明治十六年二月十四日「御届」（14春岡村外2ヶ村戸長役場文書三二一八号／袋井市歴史文化館所蔵）

【参考文献】

- 1、寺田琴次編『宇刈村誌』（静岡県周智郡宇刈村、一九五九年）。
- 2、永田久『暦と占い 秘められた数学的思考』（講談社学術文庫、二〇二〇年、初出一九八二年）。
- 3、袋井市史編纂委員会編『袋井市史 資料編 民俗・文化財・年表』（袋井市、一九八五年）。
- 4、西沢敦男「旗本屋敷・役所における初午祭について」（『地域政策研究』第22巻第4号、高崎経済大学地域政策学会、二〇二〇年）。

	年	日付	内容	場所	根拠史料
1	明治12年（1879）	4月6日～8日	「馬頭観音法会」 例年4月6日～8日に執行。 修行と、信心之輩が、安全のため乗馬を行う（安全祈願のため、ということか）。	「境内」	明治12年4月5日付け「願書」 （14春岡村外2ヶ村戸長役場文書2462、袋井市歴史文化館所蔵史料）
2	明治13年（1880）	4月3日	例年の通り、隣村の有志が集合し、西楽寺阿弥陀堂で乗馬。	「阿弥陀堂」（本堂）	明治13年3月28日付け「御届」 （14春岡村外2ヶ村戸長役場文書2480、袋井市歴史文化館所蔵史料）
3	明治16年（1883）	2月19日	例年の通り、隣村の有志が集合し、西楽寺阿弥陀堂で乗馬。	「阿弥陀堂」（本堂）	明治16年2月14日付け「御届」 （14春岡村外2ヶ村戸長役場文書3118、袋井市歴史文化館所蔵史料）
4	昭和29年（1954）	2月の二の午の日	「初午」「馬飛び」 付近の馬が西楽寺のお堂へ行って参詣をする。 飾り付けた馬に子どもを乗せ、西楽寺のお堂の周りを2～3周する。	「お堂」（本堂）	寺田琴次『宇刈村誌』（静岡県周智郡宇刈村、1954年）。

西楽寺乗馬行事一覧



『年中行事扣』2月初午条（枠線内）

『年中行事扣』二月初午条

（二月）
今月初午。先年有実代相始候得共、宥海（宥実一八二四―一八三三住職）代相止申候。彼岸門前薬師尊へ、彼岸入香花備。三前灯明等差上ル。七夜中灯明上ル也。仏供者不レ及レ申、且本尊出仕以上。当栄岳代、両度之彼岸出仕相始申候。入二中日一明三日者本尊へ精進供上ル也。右精進器、拙栄運世話二而、位階金を以て壺分相加へ、真鍮二而、壺具相求候。

西楽寺と

江戸城での儀礼

殿中儀礼と寺格

江戸時代、西楽寺は、五年に一度、年の始めに江戸へ行き、江戸城で年頭の挨拶をしていました。

このような江戸城での儀礼を「殿中儀礼」と言います。諸大名による年頭の挨拶については御存知の方も多いかと思いますが、武家の儀礼とは別の秩序で、寺院の儀礼も江戸城で行われていました。

このような儀礼は、江戸幕府による支配秩序や、その中で大名や寺院などの位置づけを定期的に確認するものでした。

こうした儀礼の場では、参加者の序列が、席次や作法、発言などにより、明確に可視化されます。このような、儀礼の場でのお寺の序列を「寺格」と言います。

江戸城での儀礼を調べることで、江戸時代の西楽寺の位置づけが分かります。また、江戸城での儀礼と言っても、江戸に行った西楽寺住職は、江戸城だけに行くわけではありません。

江戸での西楽寺の動き、というテーマも、中々興味深いものかと思えます。

江戸に行く年

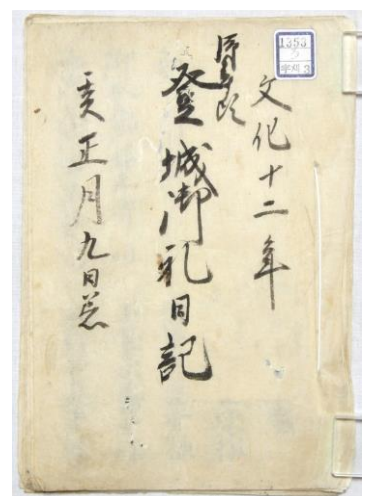
西楽寺は、五年に一度江戸城へ挨拶に行きました。この、何年に一度江戸へ行くか、という間隔と、どの部屋でどのようにお目見えと献上品の披露をするか、という二点が、寺格にとって重要な項目でした（参考文献1、3／次頁に表）。

西楽寺の寺格は西楽寺文書の「寺格覚」（近世一二一三号）などに見ることができますが、この内容は、『続々群書類従』第十二輯に収録されている『寺格帳』と同じです。

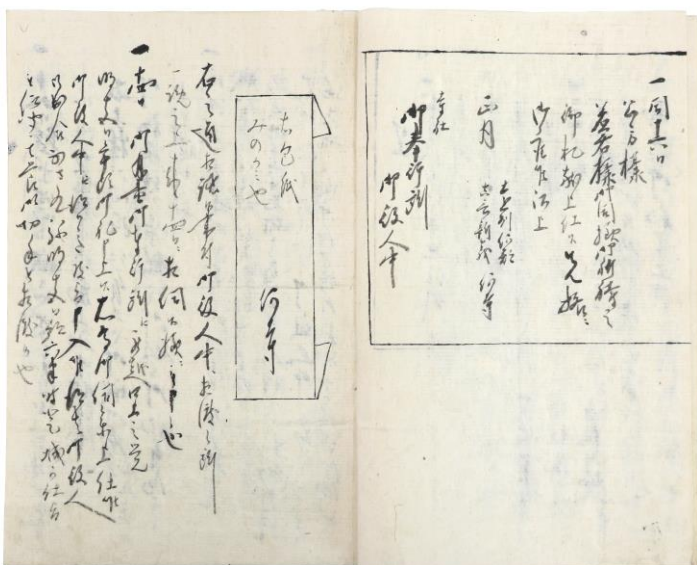
『寺格帳』と『登城御礼衣鉢書上』（西楽寺文書近世一三五二）によると、西楽寺の年頭御礼（年の始めの挨拶）は五年に一回、「御白書院御次一同」です。

西楽寺は、白書院という部屋で、油山寺、建徳寺とともに挨拶したようです（『寺格帳』）。挨拶の部屋は奥に近い方が格式高く（参考文献2、3）、白書院は、寺院の年頭御礼では、良い方の部屋でした。

これと、挨拶時の服装などを併せて検討すると（次頁に表）、西楽寺は、地方にある新義真言宗の本寺としては、平均的な位置づけだったようです。



『御年頭登城御礼日記』



『年頭御礼勤番日記』（西楽寺文書近世 1380）

10日	触頭（真福寺）と月番の根生院に、参府したことを伝えに行く。
11日	月番の寺社奉行所へ行って、寺名、宿寺が書かれた手札を玄関で渡す。 「五年目の年頭御礼勤番で来ました」と伝えると、役人が出てくるので、口上書と先例書（「願書」と「例書」）を中奉書半切に書いたものを美濃紙の包紙に包んで差し出す。 口上書・先例書を役人に渡すと、一読の上、14日にまた来るように伝えられる。
14日	月番の寺社奉行所へ行って、「15日の年頭御礼の件で伺いました」と伝え、役人が出てきて、「明日15日に登城するように」と言い、江戸城に入るための切手を渡してくれる。
15日	朝6つ半に登城。奉行所で渡された切手と献上物の十帖一本を持参する。 両上様（将軍と若君）に、同様に献上。控え室は広間千畳敷。年頭御礼の会場は帝鑑之御殿（御白書院）。 御礼を申し上げたら退出。 退出後、月番寺社奉行所へ参上し、年頭御礼が首尾よく勤められた旨お礼を申し上げる。 月番寺社奉行所で、翌16日の御祈祷の御札献上について伺う。 月番寺社奉行は、「先例の通り御祈祷御札を献上するように」と仰せられる。 月番以外の、他の寺社奉行所へ、「今朝首尾よく年頭御礼が勤まりました」とお礼を申し上げる。 老中は、月番の者のところのみに、年頭御礼が首尾よく勤まったお礼を申し上げに行く。
16日	朝6つ半に登城し、長日御祈祷御札を、公方様・若君様に同様に献上する。 月番の寺社奉行所へ、「今朝登城し、御祈祷御札を両上様に首尾よく献上できました」とお礼を申し上げる。この時、玄関で取次に声をかける。 愛宕円福寺・根生院・弥勒寺に年頭御礼の報告をする。この時、3ヶ寺に同じように音物を持参する。

西楽寺年頭御礼のスケジュール

『年頭御礼勤番留記』（西楽寺文書近世1380）より

- 【参考文献】
- 1、西沢敦男「寺社の将軍代替御礼と殿中儀礼——高尾山薬王院を事例として——」（『日本歴史』五八八、一九九七年）。
 - 2、深井雅海「将軍権威と殿中儀礼」（『風俗史学』35、二〇〇七年）。
 - 3、高嶋弘志「蝦夷地三か寺の殿中儀礼と寺格について」（『釧路公立大学地域研究』18、二〇〇九年）。

- 1、「寺格覚」（西楽寺文書近世一二一三）
 - 2、「登城御礼衣鉢書上」（西楽寺文書近世一三五二）
 - 3、「御年頭登城御礼日記」（西楽寺文書近世一三五三）
 - 4、「年頭御礼勤番留記」（西楽寺文書近世一三八〇）
 - 5、「年中行事扣」（西楽寺文書近世一六八六）
 - 6、国書刊行会編『続々群書類従 第十二』（続群書類従完成会、一九七〇年）。
- ※特に『寺格帳』、『諸宗階級』を参照。



参府の間隔	御目見・披露の形式
3年に1度	御白書院独礼
4年に1度	御大広間独礼座一同
5年に1度	御白書院御次一同
7年に1度	大広間惣礼

殿中儀礼における寺格

一般的な寺格の例

参府	5年に1度
御目見・披露	御白書院御次一同
着服	白無垢
衣	素絹 浅青、香色、浅黄の内から1色
袈裟	紋白 紫地
指貫	朝青色
裏頭	浅青色

西楽寺の年頭御礼における寺格

【典拠史料】

「寺格覚」（西楽寺文書近世1213）

『登城御礼衣鉢書上』（西楽寺文書近世1352）

ければならなかったようです（『年頭御礼勤番留記』によれば、お供の人のお弁当も購入しました）。
一部は西楽寺担当四ヶ寺（新義真言宗寺院の支配を担っていた四つの寺院）の真福寺が用意してくれたようですが、おそらくは、正月十二日、十三日の時間が空いた時に差配したのでしょう。
表「西楽寺年頭御礼のスケジュール」を見ると、江戸城への挨拶だけではなく、四ヶ寺や寺社奉行、老中など、多くの関係機関に挨拶に行っていたことが分かります。

【重要史料】



安政地震（嘉永地震）と

西楽寺の殿中儀礼（不参）



大地震と儀礼

基本的に、江戸城での儀礼は、必ず参加しなければならぬものでしたが、嘉永七年十一月四日（太陽暦一八五四年十二月二十三日）と翌五日に発生した「安政地震」（同時代史料では「嘉永地震」など／マグニチュード八・四／参考文献1参照）で被災した時には、西楽寺は、年頭御礼を欠席しています。

安政地震で、西楽寺一山は、高平山も含め、建物が全て倒れる被害がありました（重要史料1、4）。

この時の『公儀御年礼不参願記録』（西楽寺文書近世一三六四）には、詳細な記録が残っています。

それによると、西楽寺は、江戸の市ヶ谷薬王寺に不参のことを伝え、巨細取り計らってもらおうよう依頼しました。

薬王寺は手紙を受け取ってすぐに対応し、西楽寺担当四ヶ寺の真福寺とともに、「細かい資料は後で送ってくればよいから」と西楽寺に伝え、素早く寺社奉行に届け出を済ませています。

届け出を受けた寺社奉行本多中務大輔も「則（即）刻御聞済相願書等御預り被_レ成」『公儀御年礼不参願

記録』所引薬王寺書状）と、素早い対応を見せています（「すぐに受理してくれました」と、わざわざ書いています）。彼らの素早い動きは、全国から、多くの寺院が同様の被害を訴えていたことを窺わせます。ちなみに、西楽寺は、薬王寺に不参の手続きを依頼する前に、真福寺に被害状況を届け出ていたようで、一八五四年十一月（改元を挟んで数通出している）に真福寺から西楽寺へ、見舞状と見舞金が送られています（西楽寺文書近世三三六二）。

【重要史料】

- 1、『勸化帳』（西楽寺文書近世一〇一八―二二）
- 2、『公儀御年礼不参願記録』（西楽寺文書近世一三六四）
- 3、『西楽寺宛 真福寺安政地震見舞』（西楽寺文書近世三三六二）

- 4、『先般有様之図』（西楽寺文書近世三七六四―三）

【参考文献】

- 1、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『1854 安政東海地震・安政南海地震報告書』（内閣府、二〇〇五年）。

第一期

会場 袋井市歴史文化館

（袋井市浅名一〇二八番地）

期間 令和三年六月十五日（火）

～令和三年九月十日（金）

開館 月曜～金曜（土曜・日曜・祝日休館）

午前九時～午後五時

（入場は午後四時半まで）

電話 〇五三八―二三―九二六九

第二期

会場 袋井市郷土資料館

（袋井市浅名一〇二一番地）

期間 令和三年十月二十六日（火）

～令和三年十二月十二日（日）

開館 火曜～日曜

月曜休館。祝日は開館し、

その翌日及び翌々日休館。

午前九時～午後五時

（入場は午後四時半まで）

電話 〇五三八―二三―八五二一